

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第136号

草創期の
柿生中学校 - 7

『うれ柿』と学校生活の思い出……その1

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

昭和25(1950)年2月13日

私の手元に、柿生中学校の学校文集『うれ柿』の1号と2号があります。1号は、一期生の卒業する昭和24年の3月に発行されていますから、今日も発行され続けている『うれ柿』は、平成最後の卒業式となった平成30年度の発行号で、71号になりました。この『うれ柿』第1号は、敗戦後で物資も乏しく、独自の校舎すら持たず、柿生小学校に間借りしたまま卒業の日を迎えた一期生たちが、学校に何か残したいと知恵を絞り、手造りの学校文集を考えたのでしょう。先生方や後輩の応援も得て、必死になって鉄筆でガリ版に向かって字を書き続け、それを謄写版で手刷りして綴じこんだ、まさに手造り感満載の冊子でした。1年後、25年3月刊の第2号は、同じ謄写印刷でも、印刷業者に発注し、筆耕と印刷、製本をお願いした(それだけ費用をかけることが出来た)ことが良くわかる造りになり、表紙はカラー印刷という、当時としてはとてもお洒落な製本になっています。

さて、手元にある『うれ柿』創刊号は、日当たりの良い部屋で保存されていたせいでしょうか、日焼けして印刷が不鮮明な部分もあるのですが、当時の先生方が、授業や校舎建設予定地の整地作業に追われながら、疲れた体にムチ打って、コツコツと調べを進めたご自分の教育研究の成果を、精魂込めて書き綴った文章が並んでいて、読む者の胸を打ちます。それはおそらく、校舎の整地作業などにかまけ、満足に授業もしてやれなかった卒業生に対する、償いの意味を込めていたのでしょう。「教室では話してやれなかったが、せめてこれを読んでくれ。困ったときに思い出して、紐解いてくれれば、役に立つときもあるよ!」と、言いたかったのでしょう。そんな熱い思いが伝わってきます。『うれ柿』は在校生にも配られたのですが、下級生には難しすぎる内容だったように思えます。

さて、『うれ柿』第2号には、創立3年目、昭和24年度の学事日程が掲載されています。この年4月には、新校舎の起工式が行われ、夏休み中の8月下旬に完成、全校総出の引っ越し大作戦を経て、9月5日に落成記念式が行われました。なお全校生徒は収容しきれなかったのですが、ようやく自前の校舎が手にはいったのです。そんな明るい24年度だったのですが、年が明けて3年生の卒業や高等学校進学予定者の入学試験が近づいてきた2月13日月曜日の早朝、とんでもない事件が起きたのです。3年生の担任のお一人(在籍者91人でしたから、45名と46名の2クラスでした)中山正次先生が心臓麻痺で急逝されたのです。当時柿中では、1組、2組という呼び方ではなく、担任の名をとって、中山ホームとか森ホーム、中嶋ホームといった呼称が使われていましたから、中山ホームの生徒たちに限らず、3年生全体、さらに、全校の図画と工作の授業を受け持たれていたため、全校生徒もまた、あの丈夫そうで頑健な体格の先生がと、大きなショックを受けたのでした。2号の巻末に急遽10頁の中山先生追悼集が手刷りで追加されたのです。

当時、土曜日は午前中のみ4時間授業でしたから、生徒たちも先生方も、11日の土曜日には、元気だった中山先生に会っていたのです(2月11日が建国記念の日という祝日に指定されたのは1966年秋のことで、当時は平日でした。)から、誰もが信じられなかったのです。教頭の丸山先生がすぐにご自宅に弔問に伺い、ご両親にお会いして、先生が心臓に持病を持ちながら、生徒や学校のために、頑張っていたこと。生徒たちのことを気に掛けながら、帰らぬ人となったことをお聞きして学校に戻られ、その報告をうかがって、誰もが現実を受け入れざるをえなくなったことが、記されています。

中山ホームの熊沢テル子さんは、「学校に着いて、中山先生が亡くなられたと聞いた。私は信じられなかった。でも本当だと分かった。(教頭の)丸山先生が、『クラスのことをとても心配していらしたそうだと話してくださいました。私たちは、先生にどれだけ心配をかけたかわからない。みんなで先生のご冥福を祈って、一生懸命勉強しましょう。』と書き、同じく高瀬留子さんは、「一年生として柿中に入学した時から、三年生の現在まで、ずっと一緒だった先生との楽しかったことや叱られて泣いた時のことが思い浮かびます。先生のお気に障ることを言った時もあったと思います。今私は後悔でいっぱいです。」と記し、富沢京子さんは、「私たちは、ただ茫然として、生前の先生のお姿を、目の前に描き続けるばかりでした」と書き、11日に駅伝大会に出場し、好成績を収めた杉本武雄さんは、「土曜日の大会の帰りに学校に寄ると、先生は1人で仕事をしておられました。マラソン(駅伝のこと)で勝ったと伝えると、先生は大変喜んで、『それは良かった』とニコニコしながら、褒めてくれました。そんなこともあって、驚きが消えませんが、と書いています。それぞれの混乱した気持ちも、とても正直に記されています。筆者の知る限りの皆様に限りますが、今年84歳を迎えて、なおお元気な三期生の皆様は、どなたも当時のショックを鮮明に覚えていらっしゃると思います。

(続く)



学校文集『うれ柿』第2号の表紙

シリーズ
「麻生の歴史を探る」第106話

榛名山信仰 ～風祭り～

小島 一也 (遺稿)

自然相手の農民の暮らしでは、作物づくりの中で自然への畏敬を覚え、前稿富士、御嶽、大山などの信仰(講)を作りますが、これ等に並んで、今も村々の伝承に残るものに榛名山信仰があります。

榛名山とは群馬県上毛三山(赤城・妙義・榛名)の一つで、柿生岡上村郷土誌(昭和7年)によると、「古くから、暴風雨、冷害除けに、上州榛名神社に参詣する信仰で、ここから近い伊香保温泉や妙義山を訪ねている」と記しており、異常気象除けを神にすぎる信仰で、多くの場合、土地に神が宿る地神信仰と結合し、各地に榛名講が作られていました。

早野村では毎年9月1日(二百十日)に、村民が「子ノ神社」に集まって、「風祭り」を行っており、これは早野村は水田耕地が多いことから、最も暴風雨を恐れたもので、毎年4月、代参人2名がご利益を求めて榛名神社に参詣し、御師(神主)の坊(宿)に泊まり、戴いたお札を篠竹に挿して麦畑に立てたそうで、この風習は昭和20年頃まで続いていました。

黒川村の榛名山信仰も、早野同様の異常気象、嵐除け、雹除け、晩霜除けで、黒川には上・中・下の三つの講中があり、杉の葉を下げて各講中の辻々に立てましたが、下黒川の榛名講は平成10年頃まで続いていたそうです。

また、栗木村には三つの榛名信仰の講があり、その一つの講中は、明治18年(1885)、栗木字4号の通称高山(標高124m)に榛名山を模して築山、21年には祠を祀り、桜の木を植え、この地は眺望絶佳、その下で「風祭り」や「雹祭り」が、飲食とともに行われていたそうです。それは昭和の中頃まで続きましたが、川崎市の水道排水地が設けられて山は切り崩され、石祠は講元(現鈴木政康氏)方に移動、現在、区画整理事業で整備された「御嶽神社」の境内に大切に保存されています(栗木 明日を語り継ぐ)。



栗木榛名講の祠

この榛名山信仰の岡上村講中には「榛名講代参記録 明治25年～平成6年」が残されています。これは岡上神社に蔵されていたものを、岡上郷土誌会が纏めたものですが、これによると代参人は毎年5名、明治20年から始まり、平成7年が最終で、その間107年、昭和20年は欠けていますが、代参は106回に及んでいます。代参人が榛名山から戴いてくるものには、①御立札(天下泰平、構内安全、繁栄祈願、講元1枚)②大札(家内安全、五穀豊作、開運祈願、全戸)③嵐札(台風晩霜除け、戸外に立てる、全戸)④筒粥札(作物豊凶の占い札、希望者)で、筒粥(ツツカゴ)とは毎年、榛名神社では正月行事(1月15日)に神事として、粥を焚き、竹筒の中の米粒の量によって、その年の作物の作柄を占うものです。代参人は帰宅すると講員を代表の家に集め、榛名山御神体軸を掲げ、講宴を催し、お札を配り次回代表者を決めますが、榛名山への御供米、御師祈禱札、お札料、代参者交通費を含め、年間1軒当たりの講金(会費)は、年代により異なりますが、小麦1升、大豆1升、玄米1升だったと記録されています。

また、この榛名山信仰は川崎市史によると、現川崎宮前区の梶ヶ谷一野川一馬絹の村にも「雨乞い」の講があったようです。梶ヶ谷村には、嘉永5年(1852)の「三峰山、榛名山講中議定書」(田村家文書)があり、代参や費用のルールが示されていますが、これによると、1回の代参の費用が1両1分2朱と銭648文、この費用は「1軒に付1ヶ年に、米2升、小麦2升、大豆2升充取集め申すべく候事」と記され、15年に1度その家から参詣者が出る仕組みになっています。

この榛名山信仰がいつ頃から起きたかは定かではありませんが、宝永4年(1707)の富士山の大噴火、とりわけ、天明(1783～浅間山噴火)年間から天保(1832、天災、大飢饉)の頃が、最も盛んだったと思われるが、平穩、豊年の年月もあり、榛名山は上毛三山(赤城、妙義、榛名)に加え、伊香保温泉を持つ、今でいう観光地で、村々の榛名講は、勿論、信仰のためのものでありますが、講の組織や講員を見ると、代参人は観光無尽の当選人とも考えられ、榛名講の一面には、働く農民の娯楽的要素もあったのではないのでしょうか。

(参考文献)「早野七つの池とともに」「栗木 明日に語り継ぐ」「くろかわ」「岡上」「川崎市史」

シリーズ
教育の歩み 第2部

学級の誕生(6)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆ロバート・オーウェンとギャラリー方式の誕生◆

前号に記した第一次工場法は、工場主たちの反対を抑えて、次の2点を定めました。第1点は、9歳以下の子どもの雇用を禁止したことです。それまでは、5.6歳頃から9歳までの子どもたちも、工場労働に携わっていたこと、超低賃金で働かせることが出来る便利な労働者として、工場主に重宝されていたことが読みとれます。第2点は、9歳~13歳の子どもたちの労働時間を1日9時間に制限したことです。現在の小学校3年生から中学校1年生の年齢の子どもたちの労働時間を、1日最大9時間に制限することで、大人と子どもの境界線は、当時13歳のところにひかれていたことがわかります。

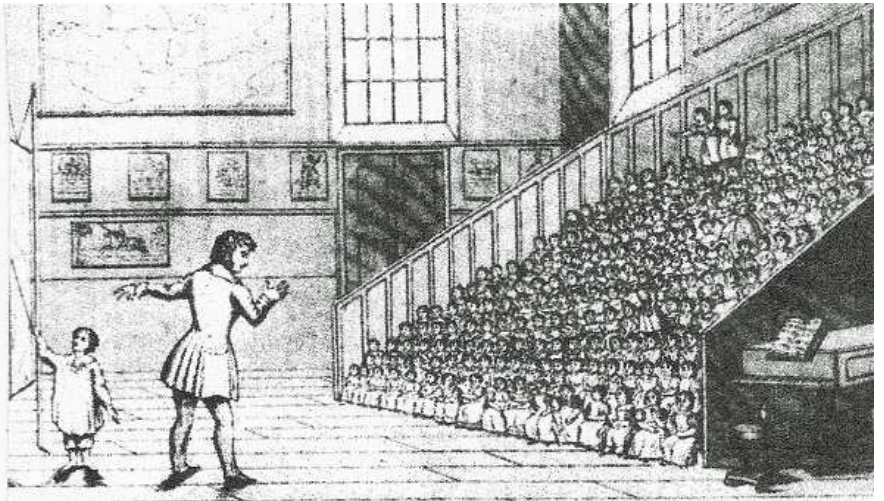
繰り返しになりますが、ここで制限されたのは、子どもたちの雇用制限と労働時間の制限です。当然、13歳から上の男性はもちろん、女性たちの労働時間も無制限だったのです。当然乳幼児を抱える貧しき母親たちもまた、生きていくためには、働きに出ざるをえません。そのため、識者の間では、幼児保育の問題が取り上げられるようになっていったのです。

白樺派の武者小路実篤や、ロシアの文豪トルストイなどに影響を与えたことで知られる、イギリスの空想的社会主義者ロバート・オーウェンは、1830年当時、スコットランドのニュー・ラナークで紡績工場を経営していました。理想主義者で、労働者への目線が温かかったオーウェンは、自らの工場に幼年学校を併設したのです。オーウェン自身、モニトリアル・システムの支援者でしたから、当初は同じシステムで幼年学校を運営しようと考えたのですが、幼児をモニターに編成することは、現実問題として不可能でした。そこでオーウェンは態度を改め、モニトリアル・システムの批判者に転じたのです。

幼年学校は、幼児を対象とするため、遊戯や音楽を採り入れ、全員一斉の活動を大幅に組み込んだのです。こうした活動は、新しい教室編成を必要としました。その上オーウェンは、幼年学校のみではなく、初等教育学校も併設していたのです。オーウェンの始めた、新しい一斉授業方式は、ギャラリー方式と名付けられ、今日の階段教室に似たタイプの教室が登場したのです。そこでは階段状に机が並べられ、数十人の生徒が、全員教師(マスター)の方を向いている、一斉授業方式がとられました。ここに初めて、1人の先生が、数10人の生徒たちと向き合う、対面方式の教場が出現したのです。この方式なら、先生は一度にすべての生徒たちを見渡すことが出来、生徒もまた仲間の行動を見ながら、一緒に学習を進めていくことが出来ます。オーウェンが模索した新しいタイプの教育システムは、彼の弟子たちによって、各地の初等教育学校に導入され、成果を上げるようになるにつれ、次第に注目を集めるようになっていったのです。初等教育への一斉授業適用の試みは、このようにして始められたのです。



ロバート・オーウェン(1771~1858年)



ギャラリー方式の授業風景

◆ギャラリー方式普及への課題◆

先生による一斉授業は、生徒のグループ分けの基準を巡る、新しい問題を鮮明にしました。モニトリアル・システムは、10人程度のグループ構成になっていましたが、モニターが個々の生徒に質問し、生徒たちが個別に受け答えを中心として、組み立てられた授業スタイルでした。進級もまた個々の生徒ごとに判定される等級制となっていました。ですから、ここでのクラスは、似たような学力を持つ生徒たちの集合体に過ぎず、今日でいうクラスとしてのまとまりを持つような集団ではなかったのです。10人前後の似たような学力を持つ生徒を集め、同一内容の読み方や計算を教える点で、効率化はされていましたが、ここでの授業方式は、まだ個別授業の範疇に留まっていたのです。これに対し、ギャラリー方式の一斉授業では、生徒同士の相互作用が強調されていました。さらに唱歌の斉唱や一斉運動など、生徒相互の一体感を醸成させようとする試みも導入されていました。こうした集団性の強調は、集団編成原理に年齢的な均質化を齎すきっかけになりました。

ギャラリー方式の授業では、レベルの様々な生徒たちを一つの教場に集めて授業するのは困難です。ですからここでは、似たようなレベルの生徒たちを集めた、いくつかの集団ごとに、別々の教室が必要となります。当初はいくつもの教室を供えた校舎などありませんから、一つの大教室をカーテンで仕切って授業するなどしていたのですが、次第に複数の教室を持つ学校が増えました。教室の数が増えると、増えた教室分の先生の確保が必要となります。ギャラリー方式の一斉授業を推進するためには、モニターに代わる正規の教員を必要なだけ養成して、各学校の需要に応えなければならなかったのです。これは大変な難問でした。この点は、1872(明治5)年の学制公布後に、日本が直面した課題を見ても、まさに明らかでした。

(続く)

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

9月 8・15・25・29日(毎日曜日) **10月** 5・12・26日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (9月1日、10月19日は休館です)

第17回 特別企画展

「江戸時代の道中記を読む」 ～ 古文書輪読会の学習の成果から ～

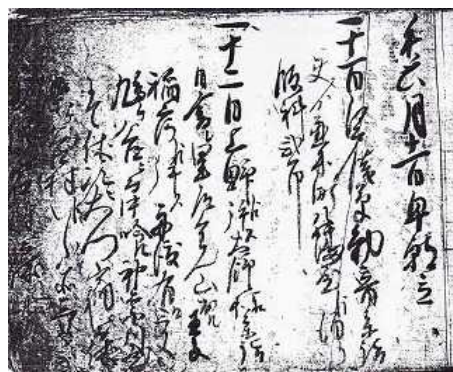
当館主催の古文書輪読会では、旧王禅寺村青戸家に保存されていた『道中記』2点を寄贈いただき、読み進めています。

今回はまだ途中ですが、その内容の一端を古文書解読文に地図や資料を付けて紹介いたします。

寛政10年(1798)の旅は80日余りの大旅行。旅人は毎日どのくらい歩いたの? 参詣した寺社はどこ? ……私たちの今の旅との違いを実感していただければ幸いです。

期間 10月5日(土)～2020年1月26日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室



柿生郷土史料館友の会 第11回史跡見学バスの旅

江戸の寺巡り

～第1回 将軍家の菩提寺とゆかりの深い寺巡り～

日 時 : 2019年11月6日(水)

主な見学先 : 増上寺 将軍家の菩提寺 旧王禅寺村は増上寺の寺領でした。

(秀忠、家宣、家継、家重、家慶、家茂)

寛永寺 将軍家の菩提寺

(家綱、綱吉、吉宗、家治、家斉、家定)

泉岳寺 赤穂浪士47士の墓所

護国寺 幕府の祈願寺

雑司ヶ谷墓地 夏目漱石ら多くの著名人

募集人員 : 先着45名

集合 : 午前7時45分 新百合丘駅北口

解散 : 午後6時頃(新百合丘駅北口→柿生駅付近)

費用 : 8,500円程度

申し込み : 往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで

必要事項 : 参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先 : 215-0021 川崎市麻生区上麻生6-40-1 柿生中学校内 柿生郷土史料館
(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切 : 10月1日(火)

問合せ先 : 小林基男 080-5513-5154 または 044-989-0622

またはメール zabi@za.wakwak.com



柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページ <http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo> をご覧ください。